

はと時計

7/8 月合併号

松蔭中高図書館発行

2026年7月14日

中学生向き

中高両方7p

高校生向き16p

今年度の全校読書運動のテーマは、「ひろく

(開く、拓く、啓く)」です。

昨今の世界情勢は、終わりの見えないウクライナ戦争、イランと米国の対立による中東情勢の緊迫など混迷を極めています。閉塞感に満ちた困難の多い時代、一日も早く広く開けた世界の実現が望まれます。そのような中、私たちの「松蔭」は、今年長い女子校としての伝統を打ち破り、開校以来初めての男子生徒を迎え新たな歴史が幕開けしました。予測不可能な変化の多い時代を生き抜くためには、心をひらき、変化や多様性を受け入れていくことが大切です。皆さん一人ひとりが、読書を通じて知見を啓き、柔軟な姿勢で物事を捉え、未来を切り拓いていく力を身につけてもらいたいと思います。

中学生向き1p

『13歳のキミへ 中学生生活に自信がつくヒント35』 高濱正伸著

実務教育出版 2011

人と比べることなく自分と向き合って、自立した大人になるための35のヒントが具体的に挙げてあります。

『かがみの孤城』上下 辻村深月著 ポプラ文庫 2021

学校での人間関係に悩む中学生たちが鏡の中の城で特別な体験をして成長していくというベストセラー小説です。(T・O)

『西の魔女が死んだ』 梨木香歩著 新潮文庫

2001

学校に足が向かなくなった主人公“まい”は、しばらくの間、祖母(西の魔女)のもとで暮らす

すことに。まいは魔女との生活の中で、身体と魂が開かれていくようです。物語の後半で出てくる、あやさんの言葉「いろんなトラブルを一つ一つ解決していくのって何ともいえない快感よ。自分の人生を自分の力で切りひらいていってって実感があるわ(216 頁)」という言葉も印象に残っています。(R・U)

『14歳からの哲学 考えるための教科書』

池田晶子著 トランスビュー 2003

自分とは何か、なぜ生きるかといった問いは大人である私たちもことあるごとに心の中で自分自身に問いかけることがあります。気がつけば、この世に人間として生まれてきている『自分』が存在していました。成長期だからこそ、そんな日常の当たり前を疑いつつ、各自の内面の視野を『拓』いていってほしいと思います。ぜひ、読んでみてください。(M・M)

『自分の思いを言葉にすることもアウトプット図鑑』 樺沢紫苑著 サンクチュアリ出版 2025

「アウトプット力Ⅱ話す・書く・行動する力」を伸ばすにはどうすればいいのか。今の小学生のリアルな声を取材して集め、その82の悩みや困りごとに「アウトプットで解決する方法」が紹介されています。小学生向けに書かれた本ですが、誰が読んでもおもしろい！私たちはみんなかつて小学生だったわけですから当然と言えば当然ですね。中学生の皆さんなら心から共感できると思います。

『「のび太」という生きかた』横山泰行著
アスコム 2004

「勉強も運動も苦手でぐうたらしてばかりいるのび太くん。でも実は、のび太くんは映画版で大活躍し、しずかちゃんと結婚もします。のび太くんは人生の成功者なのです」という前提で、のび太くんから、無理せず自分らしく生きて夢まで叶えてしまう方法を学ぼう！という本です。ちよっと視点を変えようと、新しい世界が見えてきます。

(M・U)

『ふたごのルビーとガーネット』ジャクリー
ン・ウィルソン著 偕成社 2001

読みやすい構成…二人の視点が交互に入れ

替わる「交換ノート」形式の物語。活発なルビーと穏やかなガーネットが、互いの違いを認識し、真の友情と自立を見つける物語。

(H・K)

『ぼくらのサイターの夏』笹生陽子著
講談社文庫 2005

互いに初めは距離を感じていた二人の少年のひと夏の成長と友情の物語です。互いの複雑な家庭環境を知り、少しずつ仲良くなっていく二人。優秀だったはずの兄の苦悩、同級生の苦勞、主人公桃井少年は他者の立場や気持ちを偶然のきっかけによって知っていきます。「階段落ち」ゲームで怪我をして「プールの罰掃除」を言い渡されるような悪ガキだった桃井少年は、家族や友情や社会への関心の扉を開き、人として大きく成長していきます。とても薄い文庫本で、あつという間に読み終えてしまいますが、タイトルのイメージとは逆に、スツキリとした読後感を味わえます。

(Y・K)

『となりのアブダラくん』黒川裕子著

講談社 2019

転校生はパキスタンのアブダラくん。ほとんど日本語が話せない。先生に無理矢理指名され、晴夜はアブダラくんのお世話をするようになる。毎日お弁当を持ってくる、毎日ひとりだけお祈りの時間、遠足で寺に参拝することは拒否。理解できないことだらけの中で、だんだんクラスで浮いていくアブダラくん。「ふつう」とは違うことを隠したり、怖がったりするけれど、それでいいのか？晴夜が悩み、考えていく姿は、中学生の皆さんにとって共感しやすいのでは。

(M・T)

『マンガで分かる！世界一やさしい人生の教科書』Tony 著 andYOU 出版 2026

自分自身の価値や今後みなさんが悩んだりするときにどう乗り越えていけばいいのか、どのような考え方で過ごせば毎日前向きに過ごせるのか。マンガとわかりやすいフレーズとやさしい文章でまとめられています。今後のみなさんの役に立つときが来ると思います。一度手に取ってみてください。

(K・N)

"Across the Nightingale Floor" (『鶯の床』『魔物の闇』) Lian Hearn Penguin 2002

The story is set in a fictional (架空の) Japan during the Warring States period (戦国時代). It follows two young people, Takeo and Kaede.

Takeo, whose childhood name is Tomasu, belongs to the Hidden, a peaceful group who live in the mountains. When the warlord Iida Sadamu attacks his village, Takeo is rescued by the mysterious Otori Shigeru.

Kaede is the daughter of a noble family and is held hostage (人質) by the Nogami family, allies of Iida Sadamu. She must survive dangerous political struggles and fight to regain control of her own life.

Fantasy, romance, drama, and action come together as Takeo and Kaede struggle to survive. Their journey finally leads them to the black-walled castle of Inuyama, where their fate will be decided.

K M

『君たちはどう生きるか』吉野源三郎著
岩波文庫 1982

約90年前に出版されたにも関わらず、今もなお共感できる内容であり、主人公の15歳のコペル君という中学生が、友人との関わりや学校生活の中でさまざまな経験をしながら成長していく物語は、同じように成長途中にある中学生にとって共感しやすいものです。友達との関係で悩んだり、どう行動するべきか迷ったりする場面は、私たちの日常にもよくあります。コペル君の経験を通して、本当の優しさや勇気とは何かを考えることができます。

さらに、おじさんの言葉は人生についての大切なヒントを与えてくれます。読んだ後には、「自分はどんな人になりたいのか」「どのように生きていきたいのか」を考えるようになるでしょう。また物理に興味のある人にも楽しい内容となっています。漫画にもなった品なので、「人生をひらく」ということで、ぜひ読んでみてください。

(M・K)

『昼休みが終わる前に。』高橋恵美著 スターツ出版文庫 2019

『昼休みが終わる前に。』は、過去に戻る力を手に入れた主人公が、大切な人を救うために何度も挑戦する物語です。物語の中で主人公は、自分の選択や行動が未来にどのような影響を与えるのかに気づき、少しずつ成長していきます。

この作品は、「ひらく」というテーマと深く関わっています。最初は見えていなかった真実や可能性が、物語が進むにつれて少しずつひらかれていきます。また、主人公自身の心も、過去と向き合う中でひらかれ、他者を思いやる気持ちや責任感が育っていきます。

さらに、この物語は「未来を切りひらく」という意味でも「ひらく」を表しています。どんなに困難な状況でも、あきらめずに行動することで、新しい未来を作ることができるというメッセージが込められています。

読む人に、自分の選択や行動について考えさせ、前向きな一歩を踏み出す勇気を与えてくれる一冊です。

(B・H)

『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ』

こまつあやこ著 講談社 2018

マレーシアからの帰国子女で中学2年生のサヤは、日本の学校に上手く順応しなければ、と日々悩みながら過ごしていました。そんなサヤは、ある日短歌に出会います。5、7、5、7、7のリズムにマレーシアの言葉を混ぜてのせてみると…。どんなふうに仕上がるか気になる人はぜひこの本を手にとってみてください。文化や宗教、バックグラウンドが違う人たちとの関わりも描かれていて、自分の世界を広げることができる1冊です。マレー語の響きもすごく面白くて可愛いのでそこにも注目してみてください！ (M・K)

『きみの力になる賢人の言葉90 10分読書で学ぶやり遂げた人の教え』 西沢泰生著 メイツ出版 2025

図書館で何気なく手に取った本です。皆さんが「ひらく」ためには、ちょっとした勇気が必要です。ただ、「何」を、「どう」すればいいのかを教えてくれる人は多くはありません。そんなあなたへの「古今東西の偉人・先達」からのメ

ッセージです。

(K・Y)

『はじめての動物地理学〜なぜ北海道にヒグマで、本州はツキノワグマなの？〜』

増田隆一著 岩波ジュニアスタートブックス 2022

パンダは中国、コアラはオーストラリア。こんな感じで動物が分布している地域は種類によってほぼ決まっていますよね。でもなぜ決まっているんでしょうか？ ほとんどの場合、その生物が新しい環境に進出し、生息場所を切り開いてきた結果なのです。そして、その過程や移動の原因を調べるのが「動物地理学」。本書は、その入門的な本で、色々な種類の動物が切り開いてきた過程を知ることができます。まさに動物好きな人におすすめの本です。

(N・N)

『いども「学問のすすめ」』

齋藤孝著 筑摩書房 2011

「学問のすすめ」をわかりやすい言葉で書いてくれています。「学問のすすめ」とは、勉強するということとは人にとってどういう意味があるのか、また、国や社会のレベルでどんな意味

があるのかを説いています。知恵を「啓き」、本質を考える力をつけてほしいと思います。

(A・K)

『二年間の休暇 上・下』 ジュール・ヴェルヌ著 岩波少年文庫 2012 (講談社、ポプラ社、学研等の出版社では『十五少年漂流記』となっています。)

無人島に流れ着いた十五人の少年たち。大人の助けを借りることなく力を合わせて生き抜くために、知恵を出し合い、失敗しながらも協力して困難を乗り越えていきます。この姿は、未来を切り拓くために必要な挑戦心や責任感を教えてくれます。未知の環境の中で成長していく少年たちの姿は、自分の可能性を拓く勇気を与えてくれる1冊です。

(H・K)

『おとなになるのび太たちへ』 藤子・F・不二雄まんが 小学館 2020

これは、夢を叶えた10人の大人が、それぞれ『ドラえもん』のエピソードを通して、人生で大切なことを語る作品です。私が最も印象に残ったのは、小説家の辻村深月さんが選んだ

「僕よりダメなやつが来た」というお話です。友人関係を築く上でとても大切なメッセージが込められていると感じました。進路や将来に悩むみなさんにとって、自分の可能性や未来への扉をひらくきっかけになると思います。自分はどんな大人になりたいのかを考え、一歩踏み出す勇気を与えてくれる一冊です。

(M・K)



空想科学読本シリーズ(空想科学文庫) 柳田理科雄著 メディアファクトリー 2003

空想科学読本は、アニメや特撮に登場する「もしもの世界」を科学で真面目に検証する本です。「マリオカート」のようにバナナで車がスピンするのか? 『名探偵コナン』の毛利蘭は至近距離のピストルの弾を避けたがその速さは? …そんな問いが科学の扉をひらきます。難しいと思っていた物理や数学が、笑いとともに身近にひらかれる瞬間、きつとあなたは新しい刺激に驚きと感動を感じるはずですよ。好奇心こそが世界をひらく! (Y・O)

『エコノミストの父が、子どもたちにこれだけは教えておきたい大切なお金の話 増補改訂版』 永濱利廣著 ワニ・プラス 2023

お金はとっても大切です。お金がなくて困ることはあっても、あって困ることはない(ある人はある人なりの悩みがあるのかもしれないが)。生きたい人生を生きるためにはお金が必要です。お金について学ぶことは、自分の人生の可能性を大きくひろげてくれることでしょう。値段の決まり方、保険、税金、借金、投資、物価、円安等々、中学3年生の社会で習うことも、たくさん丁寧に教えてくれます。お金の基本を学んで、お金とどう付き合うか(できれば仲良くなりたいたいのですが)、考えていってほしいです。

(T・S)

『五感の力でバリアをこえる わかりやすき・こちよさの追求』 成松一郎著 大日本図書 2009

ある美術館で、彫刻作品に直接触れる展示会が開催された。目が不自由な人が手で芸術を感じ、目が見える人も目を閉じて触覚だけで鑑賞する。「びんずるそんじや」(漢字で書く)と『賓頭盧尊者』という仏像は、病氣やケガを治してくれる(利益(りやく)があるが、手

を合わせて拝むのではなく、目が悪い人は仏様の目のあたりを触り、腕を怪我した人は仏様の腕をなでる。目が見える人も目が不自由な人も「びんずるさん」をなでて回復を祈ってきた。

だれもが分けへだてなく芸術鑑賞ができ、仏様のご利益をいただける状態を「バリアフリー」といい、それを実現するくふうが「ユニバーサルデザイン」の考え方だ。建物や製品だけでなく、情報やサービスなど目に見えないものや制度、しくみもその対象となる。この本は、「ユニバーサルデザイン」の入門編として最適だと思う。筆者は「感覚の多様性」を乗り越えるための「バリアフリー」の取り組みと、さまざまな「ユニバーサルデザイン」の実例を取り上げる。あなたの新たな感覚を「ひらく」体験になるはずだ。

(N・A)

『アドリブ』 佐藤まどか著 あすなろ書房 2019

主人公は、イタリアで生まれ育ったユージ。10歳のときにフルートに魅せられ、厳しい練習にも耐えてきました。けれど15歳になった

今、プロの音楽家を目指すのか、それとも別の道を選ぶのか、大きな分かれ道に立っています。音楽と向き合うなかで、ユージはどんな道を選ぶのでしょうか。「好きなこと」が、自分の未来をひらく力になると感じられる一冊です。

『青春サプリ。夢をあきらめない』 田中夕子
ほか文 ポプラ社 2023

いろいろな部活の実話をもとにしたシリーズ『青春サプリ』から、今回紹介するのは「夢をあきらめない」編です。バレーボール部や演劇部のほか、俳句部や熱気球部といった少し珍しい部活の話もあります。登場する生徒たちは、病気で悔しい思いをしたり、人間関係で悩んだり。それでも、昨日できなかったことが今日ではできるようになり、自分の可能性が広がっていくことが励みとなつて頑張る。そんな姿から、何かに一生懸命取り組んでみたくなる読後感です。

『わたしのbe 書きたび、生まれる』 佐藤いつ子 著 KADOKAWA 2025

「自分が思っているほど、人のことなんて、みんなそんなに気にしていないってことかな」。

主人公・文香の友人の言葉が印象的な、書道部を舞台にした物語です。高校デビューを意識しすぎて人の目が気になったり、相手を見た目だけで決めつけてしまったりする文香。そんな彼女が、消去法で選んだはずの書道にいつの間にか惹かれていき、新しい自分を少しずつ見つけていきます。運筆のリズムや墨の色の奥行きといった描写を読むうちに、書道の魅力にも引き込まれました。(N・F)

『きよなら、スパイダーマン』

アナベル・ピッチャー作 中野怜奈訳 偕成社 2017

テロによる姉ローズの死。でも主人公ジェイミーは、当時は小さくて姉の記憶があまりなく、悲しさがよくわからないでいます。両親は姉の死が乗り越えられず仲たがいに、母は家族を捨て、家を出て行ってしまいます。残された家族は地方に引っ越しますが、亡くなった姉の写真ばかりみてジェイミーに関心をもたない父のために、ジェイミーはさみしさを抱えています。学校で隣の席に座ったのは、ヒジャブをつけた魅力的な少女スーニャ。父がテロ

を起こしたイスラム教徒を憎んでいるため、ジェイミーはこの少女との関係をうまくとれません。学校の懇談会でジェイミーの父が、スーニャの母親に「テロリスト」とどなりつける場面はとてもつらい場面です。でも人と関係をつくっていくことは、宗教や大きな事件ではなく、日常の積み重ねだと感じられる物語です。

『穴 HOLE』 ルイス・サッカー著 幸田敦子訳 講談社文庫 2006

ひいおじいさんの呪いがかった家に生まれたスタンリー。無実の罪で少年更生施設へ送られ、毎日、砂漠でひたすら穴を掘る作業を命じられます。なぜ、穴を掘らされるのか？物語は、現在と過去を巧みに行き来し、家族から受け継がれた因縁の謎を明かしていきます。スタンリーの成長物語であり、友情と家族の秘密を扱った小説であり、ミステリーにもなっている多層的なこの物語を楽しんでください。

『津田梅子 女子教育を拓く』 高橋裕子著 岩波ジュニア新書 2022

津田梅子を知っていますか。明治時代に、わずか6歳で初の女子国費留学生の最年少とし

て、約11年間アメリカで学びました。この経験が梅子の人生に大きな影響を与えます。ヘレン・ケラーやナイチンゲールとの交流にもふれられています。日本の女子教育を拓いた、梅子の人生をこの本でたどってみてください。

(K・O)

『水を縫う』 寺地はるな著 集英社文庫 2023

刺繍が大好きな高校生の清澄は、もうすぐ結婚する姉のためにウエディングドレスを作ると宣言します。姉はある出来事から「かわい」と言われることが嫌で、レンタルのドレスを着たくありません。そこで清澄は、自分でデザインし、一からドレスを作ろうと決意します。けれど、実際に作り始めると姉の希望は予想以上に難しくて……。

一章ごとに語り手が変わり、「男らしき」「女らしき」という思い込みに縛られていた人々の気持ちが見えてきます。さまざまなかウエディングドレスのデザインも魅力的。よどみなく流れる清らかな水のような刺繍を、見てみたい

と思いました。「男らしき」「女らしき」の偏見をひらき、一人ひとりの生き方を考えさせてくれる物語です。

『13歳からの地政学 カイゾクとの地球儀航海』 田中孝幸著 東洋経済新報社 2022
クラシックで美しい地球儀に魅かれ、アンティークショップに入った兄妹。そこで出会った「カイゾク」と呼ばれる主人は、「最後のクイズに正解したら、この地球儀をあげよう」と言います。

国の位置が外交や経済に大きな影響を与える——それが地政学です。「遠交近攻」って知ってる？ なぜアメリカは強いのか。なぜアフリカは豊かな天然資源を持ちながら貧しいのか。その最大の理由は国のお金を政治家が海外に流しているから。日本は？ 世界で起きている出来事を、地球儀を回しながら考えてみよう。ニュースを見る目がひらかれます。

『失敗図鑑 すごく人ほどダメだった！』 大野正人著 文響社 2018
失敗をきっかけに新しい道をひらいた人たちの物語です。農村復興に取りかかった二宮金

次郎は、悪口を言われて心が折れ、一度は逃げ出してしまします。

「イケてない」と批判されたファッションショーをシャネルはどう立て直したのか。ロンドン留学中、あの天才・夏目漱石が引きこもりに。野口英世はアメリカ留学の資金を使い果たし、オードリー・ヘプバーンはルックスに強いコンプレックスを抱えていました。

うまくいくだけの人生なんてありません。失敗しても、そこから立ち上がる人の姿に勇気をもたえる一冊。思わず笑ってしまうエピソード満載です。

(Y・M)

中高両方

『ツバキ文具店』 小川糸著 幻冬舎文庫 2018

鎌倉は小高い山があり、そして、海が近くて、歴史のあるとても素敵な場所です。この物語は鎌倉に古くからある文具店を継いだ女性主人公で、ポッポちゃんというあだ名があります。文具店の店主という仕事以外に、代々、

手紙の代書をするという生業も受け継いでいます。自分で手紙を書くことができない事情に寄り添い、レターセット、筆記具、インクの色、字体なども丁寧に選び、身を清めて代筆

します。そのようにして仕上がった手紙は、封を開き、手紙を読み進めていくうちに、読む人の心を開いていきます。メールやLINEなどが日常では主流となっていますが、手紙の持つ力を感じることができます。そして、読み終えたら、きつと誰かに手紙を書きたくなると思います。この物語の続きに「キラキラ共和国」があります。ポッポちゃんのその後の暮らしが描かれています。

『椿ノ恋文』小川糸著 幻冬舎文庫 2026

ポッポちゃんが人生のステージをグンと進めていました！気持ちの上では、久しぶりに、鎌倉を舞台にしたツバキ文具店に行ける、とワクワクしながら読み進めました。ポッポちゃんが一人の女性として、悩んだり、考えたりします。ポッポちゃんはツバキ文具店で、まっすぐに自分と向き合い、日々の暮らしを営んでいきます。確執のあった、代書を引き継いだ先代の祖母との出逢い直しのような出来事に

も、手紙は効果をもたらしています。手紙には心を開く力があるのだと、改めて感じました。

(Y・Y)

『あと少し、もう少し』瀬尾まいこ著 新潮文庫 2015

寄せ集めの中学生チームが団結して駅伝に挑むストーリーです。個性とエゴがぶつかり合い、バラバラだったメンバーが、駅伝競走で苦しみながら走る中、互いに他己を理解しあい、また自分自身の内面とも向き合って成長していく。努力と他者とのつながりが未来を『拓く』青春小説です。ぜひ、読んでみてください。

(M・M)

『世界でいちばん透きとおった物語』

杉井光著 新潮文庫 nex 2023

生徒の皆さんが私に本を貸してくれます。貸してもらう度に世界が広がります。これもそんな本の中の一冊です。ありがとうございます！

著名ミステリー作家の隠し子である語り手が、亡父の遺作『世界でいちばん透きとおった

物語』の行方不明の原稿を探します。…え？

なに？そういうことだったの？と、結末にはみんなビックリすると思います。新鮮でした。個人的には、京極夏彦さんが出てきたこともよかったです。

『宙わたる教室』伊与原新著 文春文庫 2026

ある卒業生のおかげで出会えた本です。一昨年の全国読書感想文コンクールの課題図書でした。定時制高校に通う、年齢も境遇もバラバラの生徒たち。さまざまな事情を抱えながら夜の教室に集まってくる彼らが、理科の藤竹先生に誘われて、ひとりまたひとりと科学部の一員になっていきます。胸の痛くなるトラブルもいろいろ起こりますが、新しいことに挑戦し、まっすぐ真剣に夢中になるって、尊い！と心から思えます。NHKのドラマにもなりました。今春文庫化されたので、お勧めしやすくなりました。ぜひ！ちなみに作者の伊与原さんは、去年『藍を継ぐ海』で直木賞受賞。おめでとうございます！

『収容所(ラーゲリ)から来た遺書』辺見じゅん著 文春文庫 1992

これもある卒業生のおかげで出会えた本です。書かれたことを、たくさん生徒の皆さんに知ってほしいと思います。ソ連軍に捕らわれ、極寒と飢餓と重労働のシベリア抑留中に強制収容所で死んだ男性。彼が書いた6通の遺書が、12年後、彼を敬慕う仲間たちによって、遺族のもとへ届きます。実話です。大宅

賞、講談社ノンフィクション賞を受賞した作品で、二宮和也さん主演で映画化もされました。人が行う強制収容という行為に胸が詰まる一方で、人の精神力、生命力に感動します。

『どうしたらいいかわからない時代に僕が中高生に言いたいこと』 2025

『天下無敵をめざす生き方』 2026

(どちらも)内田樹著 草思社

『どうしたら…』は、ポストコロナの不確実な時代を生きる中学生高校生に向けた講演、寄稿、インタビューが集められた本です。これからは、「こうすればうまくゆく」という過去の成功体験が使いものにならない。頭を切り換えなさいといけない。どうしたら自分の潜在能力を開花させられるのか？友人を支援し、世代全体の能力を高める方法とは？『天下無敵

…』は、内田先生ご自身が『どうしたら…』の続編だとおっしゃっています。誰とも勝敗優劣強弱を競わない。比較する対象があるとすれば「昨日の自分だけ」。すがすがしいなあ！

(M・U)

『時ひらく』 辻村深月・伊坂幸太郎・阿川佐和子・恩田陸・柚木麻子・東野圭吾 著 文春文庫 2024

「ひらく」というテーマと聞いて、過去に読んだ文庫本の題名を思い出しました。三越百貨店の創業三百五十年を記念して編まれた短編集です。どれもデパートを舞台にした物語です。作者はオールスターですので、新たにお気に入りを見つけて、その人の作品を読み進めるきっかけにもなると思います。

(R・N)

『本屋さんのダイアナ』 柚木麻子著 新潮文庫 2016

育った環境が正反対の少女が成長していくお話です。悩みながらも自分の力で人生を切り拓こうとする二人に勇気がもらえらると思

ます。

(M・S)

『ソフィーの世界』 新装版 上下 ヨースタイン・ゴルデル著 NHK出版 2011

本書は短い章立てと魅力的な文章で、読みやすく構成されています。ソ

フィーと一緒に、彼女に謎の絵葉書を送っている人物を探り、西洋哲学の世界へと誘われましょう。

(H・K)

『いつも機嫌がいい人の小さな習慣 仕事も人間関係もうまくいく88のヒント』

有川真由美著 毎日新聞出版 2019

「いつも機嫌がええやつ」ってどんな人って気になって、どんな思考なんやろって思ったので、タイトルに惹かれ手に取りました。各項目ごとは短く、わかりやすく「なるほど」って思うこともあれば、「なんでやねん！」って思ったのも正直な感想です。でもいろんな考え方があって、小さなことに感謝したり、当たり前が本当は当たり前でないってことであったり、逆にいい意味でくだわりを捨てて開き直ってよくよしないなど考え方一つで自分の機嫌左

右ざれているし、当たり前っていえば当たり前
やと思う本でした。(K・N)

『じゃあ君が好き』ヨシタケシンスケ著

ちくま文庫 2026

「ひらく」というテーマを聞いてどんな本を選べばいいのか、とても悩みました。そこで今回はタイトルから「ひらく」を感じられる本を選びました。「じゃあ」という言葉は受け取り方によっては少しイラっとすることもあります。でも実は「じゃあ」は別の考えを出したり、お互い意見の折り合いをつけたりとときに使われる言葉だと思っています。『じゃあ君が好き』というタイトルはとても素敵な表現だと感じました。今まで知らなかった相手の一面に気づいて「じゃあ、好きかも」と思う瞬間は、きつと誰にでもありますよね。この本はそんな心がひらく瞬間がたくさん詰まった一冊だと思います。絵が多くて読みやすいので、本を読むのが苦手な人にもぜひ手に取ってほしいです。

(H・T)

『14歳の君へ どう考えどう生きるか』
池田晶子著 毎日新聞出版 2006

私たちはいまでも困難な時代、生きづらい時代を生きていると、私は日々感じています。それでも私たちは自分が(家族が、関係する他者が、【関係しない他者の幸せを考える】とができたなら素敵ですが)幸せになるべく、よい人生を送るべく、明日を切り拓き、希望を持ち、それぞれに一生懸命に生きていかねばなりません。

池田晶子さんは専門用語を使わずに、日常の言葉を用いて「哲学するとはどういうことか」を語る哲学者です。この本では4つのチャプターに分けて、友愛や勉強、戦争やお金など様々な概念に対して「なぜ」なのだろうか」と問いを発し、考え続けることの大切さを教えてくれる構成になっています。

困難な時代、生きづらい時代だからこそ、「〜とはどういうことなのか」という問いを自分自身に投げかけつつ、真理や真実を見ようとする眼を養い、日々を積み重ねていきたいものだと思います。

(R・B)

『大きな森の小さな家』2002

『大草原の小さな家』2002

『プラム・クリークの土手で』2002

『シルバー・レイクの岸辺で』2003

『農場の少年』2003

ローラ・インガルス・ワイルダー著

福音館文庫

いまも日曜の夕方6時が「サザエさん」の間であるように、昭和の少年ミヤザキにとつて、土曜の夕方6時はアメリカのホームドラマ「大草原の小さな家」の時間でした。原作は「大きな森」からはじまるシリーズもの。著者のローラ・インガルスの目をとおしてアメリカ大陸の開拓とともに逞しく生きる家族の姿が描かれた実話です。

頼もしく格好いい父親チャールズ(原作では、ちよつと無計画なところも)、優しく芯の強い母キャロライン(信心深すぎて血迷うことも)、賢い姉メアリー、活発なローラ、意地悪おばさんや、いじめっ子ネリー、常識人のベイカー医師など、人間味あふれる登場人物たちが毎週繰り広げるおはなしは、わくわくしながらも心がほっとする時間でした。

好奇心旺盛でおしゃべりなローラの姿は『赤毛のアン』が好きな人に、大自然を相手に奮闘する一家の生き方は『ロビンソン・クルーソー』や『ふしぎな島のフローネ』が好きな人にもおすすめです。

大雪のクリスマスのききやかなお祝い、竜巻やイナゴの大群に襲われたり、野生のオオカミに追われる恐怖、町でのいじめつことの対決、ハロウィンに本物のおばけを見てしまう話、都会の町での冒険譚まで、ある時はサスペンス、ある時はファンタジー、ある時はスピリチュアルな話まで幅広いので、小説はもちろんドラマ版もぜひ！

どんな時も神様を信じ、どんな困難にも工夫しながらたくましく生きるインガルス一家、何度も過ちを繰り返すダメダメな登場人物たちにも、また会いたくなります。まずは『大草原』『大きな森』あたりから手にとってみてください。

新情報！↓新作Netflix版『大草原の小さな家』が7月に公開されるとのこと！今から楽しみです。

(H・M)

「Wonder」 by R.J.Palacio

Knopf Books for Young Readers (英語版)

KADOKAWA (日本語版)

Wonder is the story of a boy named August, who was born with a facial difference and attends school for the first time. As he interacts with the people around him, he gradually grows and changes. The story is told not only from the main character's perspective, but also from the viewpoints of his family and friends, teaching readers the importance of understanding the feelings of others.

This book is deeply connected to the theme of “opening.” At first, many people around August feel confused or hold prejudices, but through their experiences with him, they slowly open their hearts. August himself also bravely steps into a new world and discovers new possibilities for himself. It shows how kindness, empathy, and the desire to understand others can change relationships in meaningful ways.

The English is relatively easy to read, and the story is approachable for both junior high and high school students. It is an excellent book for students who want to challenge themselves with reading in English. It was also made into a movie, which was shown here at Shoin many years ago.

D H



You can watch the DVD of “Wonder” at the library.

『人生で大切なたったひとつのこと』

ジョージ・ソーンダーズ著 外山滋比古・佐藤由紀訳 海竜社 2016

同じ本を繰り返し読む習慣は僕にはありません。この本は例外的に僕が何度も手に取って読んだ本です。あなたが「ひらかれる」ことをお約束します。

『ぼくモグラ キツネ 馬』2021 そして、『きみをわすれない ぼくモグラ キツネ 馬そして嵐』チャリー・マッケジー 著 川村元氣訳 飛鳥新社 2025

自分を見つめたい人にお勧めします。絵本です。絵本は時に真実を語り、皆さんを「ひらき」ます。
(K・Y)

『日本文化を英語で紹介する事典 第3版』

杉浦洋一、ジョン・K・ギレスピー共著

ナツメ社 2004

例えば「わび・さび」のように、日本人なら何となく分かるけれど説明が難しい文化を、英語でどのように表現するのがとても興味深く、新しい視点を与えてくれました。今はオンライン英会話などで海外の人と話す機会も

増えています。英語や海外文化に興味のある

人は、この本に限らず「英語で日本の〇〇を説明する」的な関連本を読んで、日本文化を見つめ直してみてください。英語からみた日本文化を知ると、きっと新しい発見があると思います。
(H・S)



『逆ソクラテス』伊坂幸太郎著

集英社文庫 2023

人は知らないうちに、「あの人はこういう人だ」と決めつけてしまうことがあります。この本は、そんな思い込みをひっくり返してくれる物語です。読んでみると、自分が見ている世界は意外と狭いかもしれないと思わされます。新しい考え方や相手の可能性に目を向けることで、自分の世界はどんどん開いていきます。この本を読んで、みなさんが見ているいつもの景色が少し違って見えてくるようになるかもしれません。
(P・N)

『スーツケースの半分は』近藤史恵著 祥伝社文庫 2018

私は時折、新しい小説を読みたい衝動に駆られ、ふらつと本屋に立ち寄ることがあります。この本の表紙には、鮮やかな青いスーツケースが一つ。「旅行」と「青色」が大好きな私は、吸い寄せられるようにこの本を手に取りました。このお話は、主人公の山口真美がひょんなことからスーツケースを手に入れ、ニューヨークへ一人旅をするところから始まります。そこから、色々な人の手に渡りながら、スーツケースは世界のあちこちへと旅をします。旅を終え、新しい人生を切り「拓いて」いく登場人物に、ほっこりしてみませんか。
(K・A)

『君たちはどう生きるか』吉野源三郎著

マガジンハウス社 2017

普段、本を読まない僕に、ある友人が勧めてくれた作品です。これは、15歳の少年「コペル君」が、学校や友人との出来事、失敗や後悔を通して、「人間はどう生きるべきか」を考えて成長していく物語です。主人公の本名は本田潤一。あだ名が「コペル君」です。父を亡くし、

母と暮らしています。彼には考え方を導いてくれる叔父さんがいて、二人の対話や、叔父さんが書くノートを通じて物語が進みます。コペ

ル君は、日常のいろんな葛藤の中で、一歩ずつ何が正しいのか、人はどう生きべきなのかを考えていくようになります。そしてただ成功を追いかけるといふより、自分がどんな人になりたいかを先に考えるのが大切なのだというところに気づきます。作中では、こんな出来事が出てきます。

・友達との関係で、自分の弱さや見栄に気づく
・貧しい人と裕福な人の違いを考える
・「本当に偉い人とは誰か」を考える
・自分が誰かを裏切ってしまったとき、どう向き合うか

・世の中と自分はどうかつながっているのかを考える

でも、この本は説教する感じではありません。叔父さんは「こう生きなさい」と答えを押しつけず、コペル君に考えさせます。だから読み終わると、「正しい答えがあった」というより、『自分ならどうするだろう?』という問いが残る本です。ぜひ、皆さんも読んでみてください。

さい。僕もさっそく読んでみます。つて、まだ読んでなかったんかい！

(C・S)

『華胥の幽夢』 小野不由美著 新潮文庫 2014

何年かに1度、誰かが推薦し続けている『十二国記』の10冊目です。この本自体は短編集で、番外編的な存在です。ですので、この本の世界観を理解しようと思うと、きちんと、よくわからない気持ちの悪いミステリーな1巻(2巻以降を読んでから読み返すとおなかを突き上げるような衝撃を受けます)と、そのあとの慶・戴・雁・恭といったこの物語の中の国の物語を読んだからのほうがよいのですが、今回はあえてタイトルになっている「華胥」を含むこの本だけを紹介します。理想を目指して突き進んだ結果の現実が、とても切ないです。このシリーズそのものは、ファンタジーとしての面白さをふんだんに持ちながら、国家とは何か、幸せとは何かを考えさせる壮大な作品です。そのシリーズの合間を埋めるこの短編こそ、作者が書きたかった真髓があるのではないかと勘繰ってしまいます。(S・M)

『リケジョ!』伊与原新著 角川文庫 2014
主人公は理科が大好きな小学生。家庭教師の「律」を「教授」と呼び、慕っています。そこに奇妙な事件が起こりますが、科学の力で解決していく物語です。理科が好きな人、ミステリーが好きな人は是非読んでみてください。

(N・O)

『ちきゅうパスポート』

24人の絵本作家著 BL出版 2023

この絵本は、ロシアの侵攻を受けて心塞がれているウクライナの子どもたちに希望を届けたいと、日本の絵本作家たちが発起人となり作られたものです。世界6カ国から24人の絵本作家たちが参加しています。実際のパスポートサイズの小さな絵本ですが、それぞれの絵本作家が描く理想の世界がつなぎ合わされて蛇腹のページになっています。

収益の一部はウクライナの子供たちの支援に使われると聞いて、迷わず購入しました。今は苦しくても、ウクライナの子供たちに平和な未来が開かれますように。そして、地球上のすべての子供たちに希望ある世の中が大きく開きますように。

『翻訳できない世界のことは』エラ・フランシ

ス・サンダース著 前田まゆみ訳 創元社
2016

高2特進クラスの英語の教科書(CROWN
II)、最初のレッスンで扱った内容に関する本
を紹介します。この本は、ある言語では1語で
表される単語が、ほかの言語ではそれに相当
する語がない(1対1の翻訳が難しい)という
ような語を世界中から集めた単語集です。教
科書で出てきた単語ももちろん載っています。

外国語を勉強するということは、単に言葉
だけではなく、その言語が話されている国や
地域の文化・人々の暮らしに触れるというこ
とです。私が興味を引かれたのは、例えば、マ
レー語の「ピサンザプラ」。「一本のバナナを食
べるときの所要時間」で、大体2分くらいの時
間を指すらしいです。マレー語文化圏では「バ
ナナを食べる」という行為が基準になることが
あるんですね。また、スウェーデン語の「水面に
映った道のように見える月明かり」を意味す
る「モーンガータ」という語。北欧では自然と
穏やかに一体化するような生活があって、な
んだか詞的な表現で素敵ですよ。

外国語と日本語との違いを意識することで、
新鮮な物の見方ができるようになり、自分の
価値観を大きく広げてくれます。著者自身

が描いたおしゃれなイラストもとても心地よ
く、全体としてとてもかわいいイラストブック
本に仕上がっています。全部でなくてもパラパ
ラっと見てみてください。それだけでもあなた
の目の前に新しい世界が大きく開いていくの
を実感すると思いますよ。

Short Stories in Korean for
Intermediate Learners

Oly Richards John Murray Learning
2020

最近、独学で韓国語を勉強しているという
生徒が増えてきました。韓国語と日本語は文
法が似ているので、初級はみんなあつという間
にマスターしますね。でも、そのあと中級に差
し掛かると伸び悩む人が多いと思います。私
もそうでした。

昨年の夏、ソウルのとある書店で偶然この
本に出会いました。中級韓国語の多読・速読の
勉強に最適な読み物だと思っています。数ペー
ジで終わる短い読み物がたくさんあります。し
かも、各話に注釈として単語リストがあり、単
語の意味が英語で説明されていて(英語のレベ
ルはCEFR B1~B2程度)、韓国語と同時に
英語の訓練にもなります。各章末には内容理
解の問題もあり、内容を正しく把握できてい

るかを確認しながら読み進めていくことがで
きます。

この本を見つけて、それまで中級の壁を乗
り越えられずにもがいていた私はスーッと霧
が晴れていくような感覚になりました。各章
はとても短いので、例えば「西北から六甲まで
の間に読み切ろう」というように目標を立てて
速読の訓練をしましたよ。

中級で行き詰まっている人、アジア・スタ
ディーズで韓国語を習っている人、ぜひこの本
で次なるステップの扉を開きましょう！

『音のない理髪店』 一色さゆり著 講談社
2024

この本は、昨年、徳島に帰省した時、書店で
「徳島が舞台の小説」として伊与原さんの『藍
を継ぐ海』と並んで紹介されていたものです。
昨年の読書運動のテーマに合わずに保留にし
ていたのですが、今年はテーマにぴったりの内
容なので紹介します。

日本初の「ろう理容師」となった著者の実の
祖父がモデルです。耳が聞こえないという理
由で理容師など務まるはずがないと偏見が根
強かった大正・昭和の時代、誰も歩んだこと
のない道を切り開いていく祖父の強さが描かれ
ています。語り手である孫の「つばめ」の視点

を通して話は進んでいきます。静けさの中で人が道を拓き、他者の心も啓いていくという物語です。故郷徳島の風景描写も印象的です。ぜひみなさんも読んでみてください。

(K・Y)

『ありえないほどのさいオルゴール店』

瀧羽朝子著 幻冬舎文庫 2021

誰にも心の奥底にしまい込んだ記憶というものがあります。主人公のオルゴール店の店員は、特殊な能力でその記憶をひらいてくれます。そこから生まれる様々な物語にほっこりします。短編集なので読みやすいです。もし、気に入ってくれたら、続編の『もどかしいほど静かなオルゴール店』もどうぞ。

『夕闇通り商店街 コハク妖菓子店』

栗栖ひよ子著 ポプラ文庫 2022

何かに行き詰まったり、心に不安を抱えたり、歩む道が見えなくなってしまう人が迷い込む、あやかしたちの商店街。そこにある妖菓子店で手に入れたお菓子がそれぞれの道をひらいてくれます。だけど、本当の意味で道を切りひらいたのは、妖菓子の力ではありません。短編集なので読みやすいです。姉妹編と

も言うべき『夕闇通り商店街』シリーズ』たそがれ郵便局』純喫茶またたび』夢見パン工場』もどうぞ。

(H・W)

『新明解国語辞典』三省堂

電子書籍が広まっている今、Kindle ヘビーユーザーの私ですら、紙のものを「開き」たい！と思うのがコレ。辞書なんてググった方がいいじゃないかと思いかもしれませんが、知らない言葉や知っているつもりでも説明できない言葉と出会うのは面白いですよ。世の中には辞書を通読(はじめからおわりまで全部読む)するという趣味があるぐらいです。お手洗いに置いておいて少しずつ読むのもオススメです。

そんな辞書の中でも語釈(ことばの意味の説明)がダントツで面白いのがこの「新明解」です。現在出版されているのは第8版ですが、第4版は特に語釈が面白いことで有名です。「恋愛」という言葉の意味だけでも引いてみてください。

(T・K)

『ランチのアッコちゃん』柚木麻子著

双葉文庫 2015

派遣社員の澤田三智子は上司の「アッコ女史」に突然、一週間、ランチの交換をするように言われる。三智子はいろいろな店でランチをとることによって、食を通して新しい世界を発見していく。

2014年本屋大賞にノミネートされた小説で、他にシリーズ作品として『3時のアッコちゃん』幹事のアッコちゃん』もあります。

(K・S)

『星の地図』神野紗希著 マルコポ・コム 2025

先日、礼拝でお話させてもらった際に、心をひらく媒体のひとつとして、俳句のことに触れました。この句集は、私が特に好きな俳人の一人である神野紗希さんが学生時代に出版された第一句集です。中高生のみなさんにも共感しやすいみずみずしい俳句が多数収録されています。

ここで長々と語るよりも実際に句を読んでもらった方が伝わりやすいと思うので、三句をご紹介します。

「起立礼着席青葉風過ぎた」

「ひきだしに海を映さぬサングラス」

「頑張れと言いたくて言えなくて雪」

この夏、ぜひ俳句を読んで、詠んでみませんか。あなたの感情にびったりな季節の言葉たちを、ぜひあなたも見つけてみてください。

『密室から黒猫を取り出す方法 名探偵音野順の事件簿』北山猛邦著 創元推理文庫

2021

「ひらく」といえばなんだろう、と考えたときに、推理小説が好きな私の頭に浮かんだのが「密室」でした。昨年紹介した本と同じシリーズの小説ですが、この一冊だけでも楽しめます。

密室殺人を企てた犯人がせっかく作った密室に黒猫が入り込んでしまうのですが、実はその密室の中にいる被害者は猫アレルギーだという不自然な状態に。犯人はなんとか猫を部屋の外に出したいと思うけれど……なんていう表題作のほか、計5編の短編が収録されています。

とんでもなく気弱な探偵をはじめ、登場人物は皆どこかまぬけで、犯罪に使われるトリックも変なものばかり。推理小説なので殺人

事件が起こっているのですが、それを忘れてしまいうくらいコミカルな作品です。こんなのある？ と思いつながら楽しんでもらえる一冊です。

(Y・M)

『羊と鋼の森』宮下奈都著 文春文庫 2018

この物語は、ピアノ調律師を目指す一人の青年が、自分の進む道を探し続けるお話です。

彼は特別な才能を持っていたわけではありません。迷い、悩み、立ち止まりながら、自分の進むべき道を少しずつ見つけていきます。この作品は、「自分の心をひらくこと」の大切さを教えてくれるのではないのでしょうか。中学生の皆さんは、これから自分の好きなことや得意なことを見つけていく時期です。高校生の皆さんは、進路や将来について考える場面が増えていきます。外の世界がどれほど騒がしくても、心の奥にある静かな願いに耳を澄ませること。その積み重ねが、未来を拓く力になることを教えてくれることと思います。

『蜜蜂と遠雷』上下 恩田陸著 幻冬舎文庫 2019

国際ピアノコンクールを舞台に、四人の若者がそれぞれの音を求めて挑む物語です。天

才、努力家、挫折を抱えた者、自然とともに育った少年が、互いの音に刺激されながら成長していきます。松蔭が今年、新しい仲間を迎えたように、違う価値観や考え方を持つ人と出会うことで、私たちの世界は大きく広がります。自分とは違う誰かを理解しようとする姿勢こそ、未来を拓く力になります。

(M・O)

高校生向き

『黒牢城』米澤穂信著 角川文庫 2024

最近、戦国時代の物語を好んで、本を読んだり、ドラマや映画を観たりしています。特に、これまで自分が転々として住んでいた場所の歴史は、今になってとても面白く感じています。そのような中、現在公開されている映画の原作が気になって読んだ小説です。

時は、本能寺の変より4年前。織田信長に叛旗を翻し有岡城に立て籠もった荒木村重。そして、その城の土牢に閉じ込められた黒田官兵衛。暗く湿った土牢に閉じ込められた村重と、閉じ込められた官兵衛の対話では、官兵衛の

思考はどこまでも自由で、むしろ閉じ込められているのは村重のように感じました。そして心の鍵が開いたか。どのような物語がそこにあるか、ぜひ、読んでみてください。

(Y・Y)

『私にふさわしいホテル』 柚木麻子著 新潮文庫 2015

文学新人賞を受賞しながらも、正当な評価が得られなかった小説家の女性の物語です。それでも彼女はめげることなく、進んでいきます。「スポーツが当たらなかったら、スポーツの前に飛び出せばいい。(75頁)」時に、やりすぎたり、高慢になってしまったり、どん底と思える状況に追い込まれたり…それでも進んでいく、人生を切り拓いてやるという主人公の姿に元気がもらえます。(R・U)

〈シエトランド四重奏〉『大鴉の啼く冬』2007
『白夜に惑う夏』2009 『野兎を悼む春』
2011 『青雷の光る秋』2013 アン・クリーヴ
ス著 創元推理文庫

読書好きの高校生になら、大好きなミステリーをお勧めしたいです。好きなものが新たな好きなものを呼び寄せてくれることってありますよね？例：『進撃の巨人』(言わずと知れた傑作マンガ)↓『ヴィンランド・サガ』(大傑作マンガ・ヴァイキングにも関連)↓『ヴィンランド・サガ』の舞台のひとつでもある「シエトランド(スコットランドのもっと北の群島)」に興

味を持つ↓イギリスミステリー界の大御所「アン・クリーヴス」を知る。〈シエトランド四重奏〉等を読む↓同氏原作のBBCのドラマを見る…こんなふうに、興味のあるものが次の興味をかきたてるものを選び寄せてくれます。過去の自分が未来を切り拓くわけです。…旧ソ連とイギリスに代表される西側諸国に挟まれた、北欧や隣接する国々。極寒の厳しい気候、だからこそ輝く夏。抑圧され、それでも逞しく生きる人々。アメリカナイゼーション、文化的均質化には魅力がない。北欧ミステリーは、まさに多様性という新しい世界を見せてくれます。ぜひ！

(M・U)

『リセット』 垣谷美雨著 双葉文庫 2020
昭和生まれの47歳の女性が高校生に戻り人生をやり直すというお話です。進路や将来について考える高校生だからこそ「自分は何を大切にして生きたのか」を考えるきっかけになる一冊になるかもしれません。(M・S)

『キラいな人がいなくなる方法』 堀もとこ著 あさ出版 2025

誰でもキラいな人、いますよね。なぜ、キラいになるのか、キラいになったら、どうすればいいか、みたいなことが書かれています。キラいな人のことを考える時間がもったいない！そんな時間があれば、もっと楽しいことを考えましょう。(H・K)

『見えない誰かと』 瀬尾まいこ著 祥伝社文庫 2009

人見知りが激しく、できれば一人でいたいという著者が、様々な人々との出会いを短いエッセイで綴っています。すこし迷惑そうな書き出しで始まりながらも、どの話も必ず最後はその出会いが著者に幸せを運んでくれたものであるという、素直なよろこびが述べられています。「楽しくやればたのしいんだ！」というT先生の言葉には、私自身も深く共感できました。とても読みやすく、著者とその周囲の人々の関係性がよく伝わってきて、少し心を「開く」ことで、どのような人とも前向きで希望に満ちた関係を築いていけるのだと、温かな気持ちにさせてくれます。

『エマソン 自分を信じ抜く100の言葉』

中島輝著 三笠書房 知的生きかた文庫 2025

19世紀アメリカの哲学者・思想家・詩人である「エマソン」の言葉とその持つ意味を筆者が解説しています。一つずつ簡潔に紹介されており、どの言葉も心に染みてきます。自分に自身が無くなった時、なぜかいろいろなことが上手いかなくなり、運が悪くなっていくような気がしていましたが、それはまさに自分自身が原因であったのだということがよくわかりました。本書を読むと、「自分軸」を持ち「自分を信じ抜く覚悟」が「人生を切り開く力」だと気付かされます。なかなか実際に行動に移していくのは難しいことも多々ありますが、その

ような時こそ何度も読み返してみたくなる一冊だと思います。(Y・K)

『掬えば手には』瀬尾まいこ著 講談社文庫 2025

主人公は何もかもが平均で、取り柄がないと思いついて「ぼく」。ある日、人の心を読む力を手に入れた。バイト先は店長の口が悪すぎて誰も続かないオムライス屋。そこに看護師志望の常盤さんがやってくる。この常盤さんだけはどうやっても心が読めない。他にもいつもそばにいる河野さん、陸上に誘い込んでくる香山。しまいには口悪店長の大竹さんまでからんでくる。気がついてみると「ぼく」の心を読む力って実は……。『そしてバトンは渡された』あと少し、もう少し『夜明けのすべて』の瀬尾まいこさんの作品はやっぱりじんわりほっこりした気持ちにさせてくれる。

(M・T)

The Thousand Autumns of Jacob De Zoet (仕島の千の秋) David Mitchell 著 Sceptre 2010

舞台は長崎の出島、江戸の寛政時代、18世紀末から19世紀初頭にかけての物語です。主人公はオランダからオランダ東インド会社の会計係として日本の出島にやってきた Jacob De Zoet(ヤコブ デズート)です。物語の後半で、日本 The Land of Thousand Autumns(千の秋を持つ土地)や The Root

of the Sun(日出する処)と呼ばれているという言及があり、タイトルの The Thousand Autumns of Jacob Da Zoet は「ヤコブ デズートの日本滞在記」といった意味であることがわかります。本作には数十以上の人物が登場し、それぞれの物語が語られますが、中心となるのはオランダ人医師マリヌスに学ぶ助産婦のアイバガワオリト、通詞(江戸幕府公式の通訳)であるオガワワザエモン、そしてヤコブの物語です。(K・M)

『国宝』上下 吉田修一著 朝日文庫 2021

歌舞伎のような日本の伝統芸能を題材にした作品をこれまで手にしたことはなかったのですが、映画『国宝』を足先に鑑賞し、作品の完成度にただただ言葉を失い、その世界観に引き込まれたため(私、映画館で2回、サブスクリプションで1回作品を鑑賞しました。もう1回映画館で観とけばよかったと、今更ながらに後悔しております。)原作を手に取り、上巻・下巻と読み進めました。

任侠の家に生まれ、父親を組の抗争で亡くした立花喜久雄。その後、その父とつながりのあった上方歌舞伎の名門へ引き取られ、喜久雄は歌舞伎の世界へと足を踏み入れることになります。女形としての美貌や才能、努力する力にめぐまれる喜久雄でしたが、代々の梨園の血が流れる親友であり、ライバルでもある丹波屋の御曹司、俊介と出会います。彼と兄弟のように切磋琢磨する一方、「血縁」とい

う喜久雄には超えることのできない壁がたちはだかります。それでも喜久雄はひたすら芸の道を究めるべく、稽古に打ち込んでいきます。

才能と血筋、信頼と裏切り、栄光とスキャンダル……。紆余曲折を幾重にも経験し、喜久雄はどのようにして芸の頂点へと上り詰めるのか。そして彼がその時、どのような景色を見て、何を思うのか。作品を手に取り、芸の道にすべてを捧げた立花喜久雄という役者の壮大な物語を味わってみたい。 (R・B)

『燃えよ剣』上下 司馬遼太郎著 新潮文庫 2007

幕末という大きな変化の時代を生きた土方歳三の姿を描いたこの作品は、自らの信念を持ちながら未来を切り拓こうとする人間の生き方を教えてくれます。読書を通して歴史への理解を深め、自分の視野や考え方を啓くことができる一冊です。テーマである「ひらく」を考えるきっかけとして、ぜひ読んでみてください。(M・I)

『息吹』テッド・チャン著 ハヤカワ文庫SF 2023

SF小説が好きです。とりわけ、私たちが当たり前だと思っている常識を、はじめて地球を訪れた宇宙人的視点で見たり、またその

逆、我々の常識を超えた存在に出会ったりする、目からウロコ体験に強く惹かれます。

ライアン・ゴズリング主演『プロジェクト・イルメアリー』(アンディ・ウィアー著)では、岩石型生命体(重力が強すぎる彼らの惑星では、光は役に立たないので目はなく、高圧の環境ならではの進化で、音と空気の振動で“見る”、筋肉ではなく高圧の蒸気で体を動かしている存在!)との交流が描かれます。何もかもが異なる存在を描きつつ、しかし生命としての源流はやはり同じかもしれない、という示唆は目からウロコです。

テッド・チャンの小説を読むと、さらに目からウロコな感覚が何度も味わえます。

おすすめの一編は、短編集「息吹」の中に出てくる「偽りのない事実、偽りのない気持ち」。異形の宇宙人が出てくるわけではなく、ある父親の独白と、ネイティブアメリカンの村にやってきた宣教師との交流が交互に描かれるおはなしです。

AI搭載のコンタクトレンズによって完璧な記録・記憶を持つようになる近未来と、「文字」を持たない者が、はじめて文字を理解し、文字によってその思考までもがひらかれてゆく青年の話。わたしたちが、当たり前だと思っていることを問い直す体験が待っています。ちょっと難しい表現などもたくさん出てくるので、脳みそフル回転で読んでください。SF上級者、推理小説好きなら楽しめるはず。

(H・M)

『それでも人生にイエスと言う』

V・E・フランクル著 山田邦男・松田美佳訳
春秋社 1993

読むべくしてやっと手に取った本です。もしあなたがこの本を手に取ったなら、人生があなたを招いたのです。読後には「ひらかれた」自分を実感するでしょう。フランクルは、『夜と霧』も有名です。『夜と霧』より客観的な記述のこの書物を、「一生のうちに一度」読んでみませんか。読んだ人は感想を聞かせてください。

『ころ』 夏目漱石著 新潮文庫ほか 2004

自分をひらくために、思索をするために、生きるために、手に取ってみる。日本文学の最高傑作の一つ。

『言葉の贈り物 増補版』 若松英輔著 亜紀書房 2026

大好きな詩人です。言葉の力を信じる人
に！ (K・Y)

『脳には妙なクセがある』 池谷裕二著

新潮文庫 2018

アフリカから始まった人類は地球上の様々な環境へ進出し、その地で社会を築いてきました。その活動の根本となったのが脳の発達であることは間違いないのですが、じつは、ヒトの脳は正確無比なものではなく、ちよつとした「クセ」があるという話。「自分は平均よりもできると思い込んでいる」、「行動と感情で矛盾がある」と感情を変更して納得させる」など、

思い当たることがたくさん出てきますよ。きっとこういうクセがあることが、むしろ人類の発展に寄与してきたのかもしれないですね。生命科学・生物学はもちろん、心理学に興味ある人にもおすすめです。

『有罪、とAIは告げた』 中山七里著
小学館文庫 2025

人間の生活は、新しいテクノロジーの登場とともに進歩してきたと言っても過言ではありません。モーター、PC、スマホ、それぞれの登場で生活は一変してきました。そして今はまさにAIの登場で、これまで以上に大きな変化を迎えようとしています。すでにAIは私たちの生活に入りこんでいますが、本作品は、そんなAIが司法の場にもち込まれたらどうなるか?という、かなりリアルな近未来を描いています。物語の展開も面白いですが、立場のちがう登場人物たちの「AIに対する認識と評価」に読み応えがあります。AIに対するあなたの考えを代弁してくれるのはどの人物かな、と思いながら読んでも面白いと思います。 (N・N)

『夢をかなえるゾウ』 水野敬也著 文響社 2020

主人公は、関西弁を話す神様・ガネーシャから与えられるさまざまな課題に挑戦しながら成長していく人物です。ユーモアあふれるやり取りがあり、成功する人に共通する考え方や習慣について学ぶことができます。高校生活

は、新しいことに挑戦したり、自分の可能性を発見したりする大切な時期です。本書は、自分の殻を破り、新しい可能性を「開く」ためのヒントが詰まった一冊です。ぜひ読んでみてください。

『夢をかなえるゾウ0』水野敬也著 文響社 2025

主人公は、自分のやりたいことや将来の目標がはつきりせず、日々に漠然とした不安を抱えています。そんな主人公の前にガネーシャが現れ、さまざまな問いかけや課題を通して、「自分は何を大切にして生きたいのか」を考えさせていきます。本書は、「夢を見つけること」の大切さに焦点を当てた物語です。今の自分を否定するのではなく、これからの自分の可能性を広げる視点を与えてくれます。未来をどう生きるかを考え始めるとき、自分の道を「拓く」ためのヒントが詰まった一冊です。ぜひ読んでみてください。(M・T)

『なぜ宇宙は存在するのか はじめての現代宇宙論』野村泰紀著 講談社ブルーバックス 2022

つい100年で非常に目覚ましい発展をとげている宇宙論の歩みを、最先端の発展までを含め、宇宙論や素粒子論、量子重力理論などを専門とする著者が、徹底解説。はじめての「宇宙論」として本格的な、そして現代的な宇宙論を知ることができるような一冊になっています。人間の宇宙への興味は、古来より尽き

ることはありませんでしたが、現代の宇宙論につながる「観測に基づいた系統的な世界観の構築」が始まったのは、かなり最近、ここ100年あまりのことなのです。理論物理学の最前線では、私たちの宇宙を超えた、その外側や生まれる以前などについても議論できるようになってきています。これらの驚くべき成果は、主に20世紀に入ってから爆発的な物理学の発展によってもたらされたものであり、多くの科学者の長年における仕事の結果として得られたものです。宇宙の「超初期」について紹介したり、恒星や銀河、銀河団といった現在私たちが見る構造の起源が、このような宇宙の超初期にどのようなように作られたのか、理論的な説明や、それを確認するための観測についても触れていきます。さらに、近年理論物理学者の間で急速に受け入れられつつある描像である「マルチバース理論」を紹介し、多くの宇宙においては素粒子の種類、性質およびそれを支配する法則、さらには空間の次元に至るまで、多くのことが私たちの宇宙とは異なっていると考えられるのです。私たちのこの宇宙が始まる前から寿命について、またこの宇宙の外側まで、壮大なスケールで語られる、わかりやすい最先端の宇宙論です。

『世界でいちばん素敵な宇宙の教室』多摩六都科学館天文グループ監修 三才ブックス 2017

ギネス世界一に認定されたプラネタリウムの解説員が贈るビジュアルブック第2弾のテーマ

は、夜空のさらに向こう側にある「宇宙」です。「ブラックホールってなに?」「地球と宇宙の境目はどこ?」など、宇宙に関するさまざまな疑問に、シンプルかつわかりやすく答えています。写真は、『夜空の教室』に引き続き、日本星景写真協会のメンバーが世界各地で撮影した美しい星空写真(今回も素敵な写真が集まりました!)のほか、ハッブル宇宙望遠鏡などがとらえた神秘的な写真も多数掲載。写真集としても楽しめます。(N・M)

『適者生存 メジャーへの挑戦』長谷川滋利著 ぴあ 2000

メジャーへの挑戦では、日本において野茂が代表であるが、野茂に刺激を受け、いかにアメリカにアジャストしていくか、という刺激のある本である。言葉、文化、生活、それぞれが異なる地で、いかに成功するか、アメリカと日本の間にあるもの、メジャーで通用するために、アジャストメントに必要なことは何か、を考えながら読むと面白い。(F・T)

『寂聴 源氏物語』瀬戸内寂聴著 講談社 2023

私が学生の頃、初めて読んだ源氏物語の訳本が瀬戸内寂聴さんの訳本でした。みなさんにも比較的読みやすい表現になっていると思います。千年以上前の人の心も根本的にはほ

とんど変わらないし、人を愛する喜びや悩みもほとんど変わらないことに気がつくのではないかと思います。古文の苦手な人も訳本なので読みやすいはず！ぜひ古典の扉を開いてみて下さい。

(A・K)

『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎著
岩波文庫 1982

コペル君が日常の出来事を通して、人間関係や社会の仕組みを学び、「どう生きるか」を模索していくお話。叔父との対話や手紙が、物事を広い視点で考える力を育ててくれます。自分自身の考えで未来を拓くための指針に満ちています。人生を見つめ直すのにベストな一冊です。

(H・K)

『坂の上の雲』 全8巻 司馬遼太郎著 文春文庫 1999

時代が大きく変化するとき、人はどのように未来へ向かって歩んでいくのでしょうか。

『坂の上の雲』は、明治という新しい時代を生きた若者たちが、広い世界に目を向け、学び、挑戦していく姿を描いた作品です。未知のものに出会ったとき、人は戸惑うこともありま

す。しかし、自分の可能性を信じ、一歩を踏み

出すことで、新しい道は開かれていきます。変化の多い現代だからこそ、広い視野を持ち、柔軟に考え、自分自身の未来を切り拓く力が求められています。この作品を通して、時代を生きる人々の姿から、学ぶことや挑戦するこ

との意味を考えてみてください。(Y・K)

『君の臍臓をたべたい』 住野よる著 双葉文庫 2017

人と関わることを避けてきた主人公が、明るく自由に生きる少女と出会い、少しずつ心をひらいていく物語です。限られた時間の中で、日常の大切さや「生きること」の意味を考えさせられます。映像化もされ、多くの人の心を動かしただ作品です。周りの人との関わり方や自分の生き方について、考えるきっかけを与えてくれると思います。(H・H)

『火車』 宮部みゆき著 新潮文庫 2012

休職中の刑事が知り合いからの依頼で失踪した1人の女性を探す……という話です。この女性がなぜ失踪したのか、どこに行つたのか……主人公の刑事がいろいろと探していく中で、彼女の「真実」と社会の深い闇が見えてきます。30年も前に発表された作品であるのに、今なおその闇は私たちの足元に広がっています。息をつく間もないほどの強烈な読み応えと、読み終わった後の何とも言えない後味の悪さは、30年たった今でも胸の中に居座っています。この作品自体は文学賞の在り方を大きく変えた一作となりましたが、それも納得のすごみがあります。「社会派」と呼ばれる作家の真髄を、ぜひこの夏に垣間見ていただきたいです。

(S・M)

『私たちの世代は』 瀬尾まいこ著 文春文庫 2026

感染症の流行で小学校が休校になり、不自由な生活を送らざるをえなかった「冴(さえ)」と「心晴(こはる)」。境遇の異なる二人の人生がやがて交わる時を迎えます。いわゆる「マスク世代」の子どもたちと、それを見守る人々の優しさを描いた物語です。あの頃、自分自身はどんなふうに過ごしていたかを思い出しながら読んでみるのもいいかもしれません。

(N・O)

『グレタ・ニンプ』 綿矢りき著 小学館 2026
不妊治療のうちに子供を授かった妻が豹変していく様子を、夫の視点から描いたコメディです。

作者の綿矢りきさんは芥川賞作家ですが、これまでの純文学の枠を大胆に解放して、新たなスタイルを拓いています。心の声や感情の昂りなどを本文の文字のフォントの種類やサイズを変えることで、読者にわかりやすく伝えていきます。

物語の語り手である夫は、最初は地味で控えめだった妻の変貌ぶりにとても戸惑い途方に暮れますが、次第に妻を受け入れていきます。初めて妊娠するということは女性にとつてとても大きなことです。妻はもしかしたらそれまで抑圧して封印していた本心を解き開き、自分らしく振る舞えるようになったのかもし

れません。妻とは、母とはこうあるべきだとい

うような固定観念を解き放つという過程だったとも読めます。夫もまた戸惑いながらも次第に親になる覚悟を固めていき、新たな家族としての日常の扉を開いていく過程が描かれています。一気に読めると思います。ぜひ読んでみてください。

『劇場という名の星座』 小川洋子著 集英社 2026

私は舞台鑑賞が大好きなので、タイトルに惹かれて読んでみました。舞台は東京有楽町にある帝国劇場。現在は建て替えのために一時休館となっていますが、案内係やエレベーター係、清掃員、観客など、これまで劇場を支えてきた人たちの記憶が描かれた8つの短編から成っています。小川洋子さんならではの静謐な描写で作られる世界観に浸りながら読み進めました。登場人物たちの記憶が、まるで夜空の星たちのように幻想的に煌めいているように感じます。私はよくお芝居やミュージカルを見に行きますが、私の高揚感や胸が躍る感覚というのは実に多くの人々が関わってくださって味わるものなんだなと感謝の気持ちでいっぱいです。

物理的には劇場そのものは一旦閉じられています。過去の記憶をたどることは新たな劇場を開くためのプロセスではないかと感じました。この本を読んで、commencement（主にアメリカで「大学の卒業式」という意味）という英単語が頭に浮かびました。物事の終わりは新しいことの始まりです。（球根の歌み

たいですね。）2030年の劇場再開を心待ちにしたいと思います。

『ガザ・キッチン〜パレスチナ料理をめぐる旅』
ライラー・エルハッダード、マギー・シユミット
共著、藤井光 翻訳監修

株式会社オレンジページ 2025

パレスチナ、ガザ地区と聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか。紛争地としてのイメージしかない人も多いでしょう。料理や食べることが好きな私は、「ガザの料理ってどんな感じなんだろう」とあまり深く考えずにこの本を開いてみました。最初は、カラフルな野菜やハーブ類、珍しいスパイス、新鮮な海鮮類の写真に目が留まりました。まるでそれらの香りが感じられるようで、ワクワクしました。伝統的な出汁や豆料理などの家庭料理の数々にとても興味がありました。しかし、すぐにこの本は単なるガザ地区の料理のレシピ本ではないということに気づきました。著者が丁寧に取材した内容がコラム風に綴られており、読み進めていくうちに、そこで暮らす人々がどんな思いでどんな工夫をして毎日を過ごしているのか、まるでルポルタージュを読んでいるような感覚になりました。この本の取材・初版は2010年代、封鎖下でも人々は食べるといいう行為を通して自分たちのアイデンティティーを守ってきた様子が伝わってきます。台所に集まった女性たちが笑顔で料理を用意している様子、活気ある市場の風景、無邪気につまみ食いをする子供のおどけた表情など、私たちと何ら

変わらない日常や開放的な雰囲気があるにはあつたはずですが、2023年のイスラエル軍とハマスの大規模な衝突以降、状況は極めて深刻になっています。ここに紹介されている人たちの笑顔がどれだけ残っているのだろうかと思像すると、本当に胸がつぶれそうです。

このようなガザ関連の本はとても貴重だと思います。料理の写真を見るだけでもいいので、ぜひ手に取って本書を開いてみてください。そして、ガザやパレスチナのことについて、自分の目を開くきっかけにしてほしいと思います。

(K・Y)

『発酵文化人類学 微生物から見た社会のカタチ』 小倉ヒラク著 角川文庫 2020

「ひらく」というテーマを聞いて真っ先に浮かんだのがこの著者でした。発酵食品、みなさんはよく口にしますか？チーズや納豆は人によつて好き嫌いが分かれるかもしれませんが。ちなみに私は果物や穀物を発酵させた飲み物が大好きです。「発酵」と「腐る」の違いってなに？という素朴な疑問を持ったことがある人にはドンピシャです。また歴史や文化などの文系っぽいジャンルと、情報や生物などの理系っぽいジャンル、さらにはデザインの話が絡んでいる文章なので、今まで学校で学んだことの集大成としても面白いですし、進路について考えるきっかけにもなると思います。

(T・K)

『パンとスープとネコ日和』シリーズ
群ようこ著 ハルキ文庫 2013

ドラマにもなった原作で5シリーズまであります。主人公の母から譲り受けたお店を開くことで新たな出会いや自分自身の心を開くというお話です。日々の生活を丁寧に過ごすという感じさせてくれます。私の大好きなサンドイッチやスープのお店です。一度覗いてみてもらえると嬉しいです。(M・S)

『笑わない数学』NHK「笑わない数学」制作班
編 KADOKAWA 2023

最近、ニュースで暗い世界情勢を目にした、身の回りの大きな変化に戸惑ったりして、「これからどうなるんだろう」と不安に思うことはありませんか？そこで、これからの時代を生き抜くヒントになりそうだと思う、私のイチオシの『笑わない数学』という本を紹介します。

数学と聞くと、「難しそう」「ただの計算」と壁を作ってしまう人も多いかもしれません。しかしこの本を開くと、そこには「常識を疑い、数々の困難に挑んだ数学者たちの熱いドラマが描かれています」。

たとえば、第1章に登場する最高峰の未解決問題「リーマン予想」の歴史がそうです。一見すると不規則でバラバラに並んでいるように見える「素数」の裏には、実は誰も想像しなかったような美しい規則性が隠されているのではないかと天才リーマンは全く新しい視点

へと心を「開き」ました。彼はそれまでの常識の枠組みにとらわれず、人類の知見を大きく「啓く」ことで、数学の新しい扉を次々と「拓いて」いったのです。変化の多い今だからこそ、私たちは彼のように柔軟な姿勢で多様性を受け入れ、思考を止めない強さを持つ必要があります。

本を開くことは、自分の世界をひらくことです。この本は現在、第2巻、第3巻へとシリーズが続いており、私たちの知的好奇心を刺激し続けてくれます。

新たな歴史の幕を開けた今だからこそ、読書を通じて知見を啓き、自らの手で未来を力強く切り拓いていきませんか。まずはその最初の扉として、この本を「開いて」みてくださーい。(M・N)

『経済評論家の父からの息子への手紙 お金と人生と幸せについて』山崎元著 Gakken 2024

経済評論家の山崎さんが、お亡くなりになる前に書かれた本です。仕事への向かい方、働き方、人との付き合い方など、これから大学生になる息子さんへ向けたメッセージとして書かれています。資本主義の中で、どうやってお金を増やすか、ということについてもアドバイスが書かれています。これから、自分の人生を切り拓いていく高校生に、ぜひ読んでもらいたい本です。

『現代戦争論 ロシア・ウクライナから考える世

界の行方』小泉悠著 ちくま新書 2026

2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は、5年目に突入している。筆者も書いている通り、現在進行中の戦争を対象として本を書くことには困難が伴う(通常、重要な情報が後から出てくるものである)。それでも、今、この現実世界で起きている戦争について知ること、考えることは大きな意味がある。自称「職業的軍事オタク」による、主に軍事面からの分析は非常に興味深い。日本の安全保障について考える際にも、非常に参考になる。(T・S)

『「心」のお仕事 今日誰かのそばに立つ24人の物語』河出書房新社 2021

礼拝ではしばしば「他者に寄り添いましょう」と語られる。そもそも自分の「心」を他者のそれに近づけようとする作業とは、いったんどのようなものだろうか。何をどうすれば「寄り添った」ことになるのだろうか。その結果、何が生まれるのだろうか。こんなことを考えていたときに出会ったのがこの本だ。

「心のしごとにつきたい? とりあえずやめておきましょう!」と一人目の精神科医がいきなり攻めてくる。「他人を諦(あきら)めなさい」ひきこもり、DV、貧困に苦しむ外国人労働者に日々向き合うソーシャルワーカーは、すべての人をカバーできないとこぼしながらも、社会の「隙間」を埋める決意をしている。ホームレスを支援する医師は「何が正しい

かなんてことはわからない。どうしたらいいかなど答えはない」と言いながらも、「そうすることが僕の仕事だ」と言い切る。

精神科医、公認心理師、スクールカウンセラー、行政機関のソーシャルワーカー、大学教授、研究者、劇作家など24人の「専門家」が「心」について語る。心理のしごとに興味を持ち始めたあなたに多角的な視点を「ひらく」一冊になる。

(N・A)

『夜、寝る前に読みたい宇宙の話』野田祥代著
草思社文庫 2025

ふだん意識していませんが、私たちは太陽のまわりを時速10万kmで回る地球の上で暮らしています。のんびり寝転んでいても、実は猛スピードで宇宙を移動している。そう思うと、不思議な気持ちになりますね。この本では、そんな宇宙の話がやさしい言葉で語られていて、とても読みやすいです。宇宙から見た自分「宇宙からの視点」にふれることで、いつもの景色が少し違って見え、視野が広がっていくように感じられます。宇宙にあまり興味がなくても、楽しみながら読める一冊です。(N・F)

『サード・キッチン』白尾悠著 河出書房新社 2020

アメリカの大学に留学した尚美は、言語や文化の壁にぶつかり、孤独な日々を送っていた。そんな彼女が出会ったのは、多様な背景を持つ学生たちが集う「サード・キッチン」。仲間と

の交流を通して、自分のなかにある思い込みや偏見と向き合いながら、少しずつ成長していく…。読後には人とわかりあうことの難しさと喜びが胸にせまってくる。

(K・O)

『見えるか保己一』蟬谷めぐ実著
KADOKAWA 2026

『昨年の大河ドラマ』べらぼう』と同じ時代を生きた、盲目の天才学者・埴(はなわ)保己一(ほきいち)の生涯を描いた小説です。

幼いころに失明した保己一。母は必死に治療費を工面しますが、視力は戻りません。当時、盲人の仕事といえば按摩(あんま)や鍼(はり)でした。しかし、それが得意でなかった保己一は、師に才能を見いだされ、学問の道へ進みます。妬みや裏切りに苦しみ、絶望して身投げを図るほど追い詰められながらも、生来の誠実さと人望によって多くの人に支えられ、日本の古典を集大成した『群書類従(ぐんしよるいじゅう)』を完成させます。その偉業は、後の国学や歴史研究の礎となりました。

最終章では、生涯にわたって保己一を陥れようとした人物が再び現れます。しかし、その存在さえも保己一の光を際立たせます。

目の見えない人に「見えるか」と問いかける題名に、最初は意地悪さを感じました。けれど、読み終えたとき、その言葉に込められた本当の意味が心に響きました。(Y・M)



夏休み、松蔭中高図書館は8月3日(月)から19日(水)まで閉館します(土日も)。推薦図書には図書館にしかない本もありますので、ご注意ください。

7月21日(火)から24日(金)まで図書館システムの入れ替えを実施します。コンピュータでの検索ができません。ご了承ください(貸出はできます)。

